

「凡夫の身」

橘 秀憲

謹んで新春のお慶びを申し上げます。本年も何卒よろしく願いいたします。

今年は東本願寺創立の上人、第12代教如上人の400回忌に当たり、京都の東本願寺では、春の法要期間中の4月2日から4日まで、教如上人400回忌法要が厳修されます。

岐阜別院の始まりも教如上人の時代と伝えられていますが、戦乱の中にあって、宗祖親鸞聖人のみ教えを後世に相続していくという願いが偲ばれます。お誘い合わせて御参詣いただきますようお願いいたします。

教如上人が伝え、相続した宗祖のみ教えですが、

凡夫むみょうぼんのうというは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、親鸞聖人は私たち人間の姿を「凡夫」と言い当てておられます。しかしながら、中々自分のことは素直に受け止められない、見えないものです。

先達のお話ですが、私たちは地上にしながら、地球上の自分の位置を知ることはできないし、知るためには地上から離れないと見えてこない。つまり地球儀のように地球を見ようと思うと、月まで離れないと見えないわけですが、私たち人間の心もそれに似ていると、外から私たちの心を照らさないと心の全容は見えないということです。外から照らして私たちの心を教えてくださる眼が仏さまの眼であると教えていただきました。

教えを聴くことを通して、仏さまの眼に映る私たちのあるがままの心を教えていただき、私たち自身の心に気づかせてもらうということです。自分のことは一番わかっていると思っているけれど、仏さまの眼で初めて自分のあるがままを気づかせてもらうことで、自分の眼もひらかせていただくということでしょう。常に自分のものさしで問うのではなく、自分のものさしを問うという姿勢が大切なのだと思います。

蓮如上人御一代記聞書には、

人のわろき事は、能くよ能くよみゆるなり。わがみのわろき事は、おぼえざるものなり

と教えられております。自分の心を見つめることはやはり難しいものですが、教えを聴くことを通して教えていただく。教えを聴くということは、決して自分の欲望を満足させるために聴くのではないのです。お参りすることで良いことがあったり、お金が儲かる、病気が治るといったことのように、自分中心の心でお参りするということがありますが、良い自分になれるわけではなく、宗祖が示された「凡夫」としての姿、どうしようもない自分が見えてくる、気づかせてもらうということだと思えます。